



龍昌寺



本陣跡



問屋場跡

①龍昌寺  
「大猷院様御霊屋有之」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)慶安4年(1651)、徳川家光の遺骸を日光廟(大猷院)に葬送の途中、遺骸の安置所が設けられたが、今は御霊屋はない。そばに由来碑が建てられ位牌が伝えられている。「不動堂境内にあり」(日光道中略記)という寝起(ねおこし)不動尊がある。



小山市立博物館

⑤小山市立博物館  
高札、乙女河岸の模型、中世の板碑、安房神社の大絵馬が展示されている。

⑦泉龍寺  
江戸時代の乙女村は日光街道と思川の乙女河岸を結ぶ水陸交通の要衝であった。日光街道から乙女河岸へ行くには、泉龍寺の南側に街道と河岸を往來する道があり、そのため泉龍寺は河岸関係者や河岸を往來する大名や商人から篤い信仰を集めた。乙女河岸問屋の青木寛左衛門や山中人郎兵衛、江戸日本橋の回送問屋乙女屋金兵衛、白河藩主松平定實、同藩主で寛政の改革の松平定信、また、日光東照宮へ往來するおりに泉龍寺へ参拝した薩摩藩主島津光久や近江膳所藩主本多康恒など、江戸と多くの往來者の名前を知ることができる。なかでも白河松平家は参勤交代の折、泉龍寺にて休息をするのを例としていた。  
昭和56年(1981)11月までは間々田駅入口交差点にあったが現在地に移転した。境内には松尾芭蕉の句碑「川上とこの川下や月の友」があるほか、江戸時代の刻経塔、手水石、灯籠などの石像物が並んでいる。

⑫本陣・脇本陣・問屋場跡  
小山間々田二郵便局向かい付近に、本陣・脇本陣の説明板がある。江戸後期の絵図では、本陣前に高札場、南に脇本陣、街道東側に問屋場が描かれている。街道が南北に走る間々田宿や小山宿・新田宿といった宿駅では、本陣や脇本陣が街道の西側に設けられる場合が多かった。これは冬の北西の風に対して、風上になるよう配慮したもの。

⑪ 間々田宿  
間々田宿は、江戸から11番目の宿場で元和4年(1618)に宿駅となった。江戸時代はじめは結城藩領、その後古河藩領や幕府代官の支配を経て、江戸後期は宇都宮藩領となった。「宿内日光の方を上として、土手向町・上町・中町・下町と四町にわかれて」(日光道中略記)これは他の宿でも同じで、いかに徳川家康を尊敬していたかがうかがえる。日光・奥州・甲州道中宿村大概帳によると、町並みの長さが9町50間(約1.1km)、家が175軒、旅籠が50軒、本陣・脇本陣が各1軒、問屋場が3軒あり宿の人口は947人(男440人、女507人)、駄賃・賃銭 荷物一駄・乗掛荷人共75文、軽尻馬1疋49文、人足1人37文でした。

⑨ 榎を過ぎり坂を終えると、琴平神社のあたりが間々田宿の南入口で、かつては土塁や柵があった。

⑥乙女不動瓦窯跡  
奈良時代、この窯でつくられた瓦は下野薬師寺など重要な寺院で用いられた。現在は史跡公園になり、窯や工房が復元されている。国指定史跡。

④このあたりまで松並木があった



39 間々田宿～小山宿  
栃木県小山市  
仏光寺～間々田  
(歩行距離 2063m 26分)  
歩く地図でたどる日光街道  
<http://nikko-kaido.jp/>  
JZE00512@nifty.ne.jp

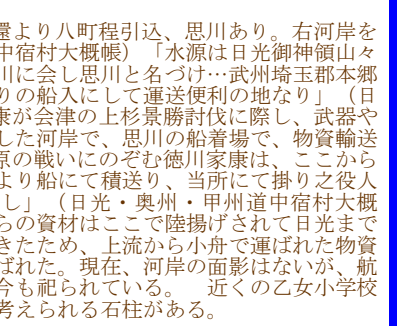
⑬浄光院  
境内には宝永元年(1704)の邪鬼・二鶏・三猿像を彫った青面金剛や多数の石仏、嘉永6年(1853)建立の芭蕉句碑がある。寺の前を過ぎるとまもなく間々田宿の北の出口で、かつては土塁と柵があった。



⑩間々田ひも  
手編みの組紐で、その技法は鎌倉時代の伝統を引き継いでいます。刀の下げ緒、甲冑の紐として使われましたが、今は帯紐や羽織紐など民芸品として珍重されています。



⑧逢いの榎  
ゆるい坂の下に「逢いの榎ここにあり」と刻まれた石碑が建っている。江戸と日光のちょうど中間(どちらへ行くにも18里約72km)に当たることから「間の榎」と呼ばれていたが、いつからか願いをかける男女が結ばれる「逢いの榎」と呼ばれ縁結びの榎として祖師堂が建てられ参拝する男女も多かった。



②馬頭観世音  
乙女交差点を乙女河岸の方へ入り約436m5分行った右。台座に「右山川 しもまつ もろ川、左ままだ 小山 いうき」と刻まれている。

④小山市立東屋美術館(小川住宅) 小川家は、乙女河岸で肥料問屋「車屋」を営んだ豪商。その後、明治末期になって日光街道(国道4号)沿いに移転し、大正元年(1912)に「小川商店」として開店した。今も残る建物のうち母屋・米蔵など5棟は国登録文化財。

③乙女河岸・乙女大橋  
乙女交差点より989m12分。「乙女村往還より八町程引込、思川あり。右河岸を字乙女河岸といふ」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)「水源は日光御神領山々より流出、…黒川と唱へ、三津河岸にて姿川に会し思川と名づけ…武州埼玉郡本郷村にて利根川に入る」「江戸、或は近国よりの船入にして運送便利の地なり」(日光道中略記) 慶長5年(1600)、徳川家康が会津の上杉景勝討伐に際し、武器や兵糧米を陸揚げしたことを契機として発展した河岸で、思川の船着場で、物資輸送の拠点。慶長5年小山で評定を終え関ヶ原の戦いの戦いおむ徳川家康は、ここから乗船して江戸に下ったという。「江戸より船にて積送り、当所にて掛り之役人立会、車馬等に積替、陸路運送有之候よし」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)日光東照宮が建設された時も、江戸からの資材はここで陸揚げされて日光まで運ばれた。また、大型の高瀬船が行き来できたため、上流から小舟で運ばれた物資が、ここで高瀬船に積み替えられ江戸へ運ばれた。現在、河岸の面影はないが、航行を守護する大杉神社(土手の左手前)が今も祀られている。近くの乙女小学校には、この河岸から出土した鳥居の一部と考えられる石柱がある。